

# 話し言葉の性差-男性の「女性語」使用とジェンダーの 関わりに注目して-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高崎, みどり メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/9905">http://hdl.handle.net/10291/9905</a>

話し言葉の<sup>ジェンダー</sup>性差

—男性の「女性語」使用とジェンダーの関わりに注目して—

高 崎 みどり

## Gender difference in the spoken Japanese

TAKASAKI Midori

It is well known that there is “Woman Language” in Japanese which is mostly spoken by women. This fact has been considered as “a virtue of the Japanese woman” or “its womanliness” and therefore it has been taken positively in the Japanese society. However, on the other hand, it has worked as “a gender role” which imposes a restriction on the behavior of modern Japanese women. In the modern Japanese, the gap of the spoken language between men and women has narrowed. When I studied “Language spoken by men” in the working place, I found that some of them speak typical “Woman’s words” with the ending such as “~noyo” and “~ne” and also words such as “oishii”. In fact, “Woman Language” has not been a well-established unchanging entity historically. It is known that men used also “Woman Language” in the past. Therefore, we should think about the words such as given above not only from the view point of “Woman Language” but also from the view point of their function. We should shed light on these words from the aspect of “promotion of conversation”, “consideration for others”, “politeness”, “softening of expression”, and so on. It is natural for men to use these words if needed in some circumstance.

## 《個人研究》

話し言葉の<sup>ジェンダー</sup>性差

—男性の「女性語」使用とジェンダーの関わりに注目して—

高 崎 みどり

## 1. はじめに

本稿では、男性の話し言葉における「女性語」使用に注目し、そのことがジェンダーとどのような関わりを持つのか、ということを考えてみたい。

まず、考察の前提として、先行研究から「女性語」とは何かということを見ていく。ジェンダーについてもふれる。次に、自然談話データベースから、男性の「女性語」使用の例をいくつかタイプ別に拾い、観察する。最後に男性の「女性語」使用の意味について、やはり先行研究を参照しながら考察してみることにする。

## 2. 「女性語」について

ここまで「女性語」と「 」つきで、“いわゆる”という意味をもたせて表記してきた。これは文字通り、「先行研究で言われているところの」という意味に加えて、「女性語」という言い方自体にジェンダー概念が色濃く反映しているため、自分としてはこの言い方に与しないという立場の表明でもある。このようなことを論じていくプロセス自体にも、簡便のために「女性語」という術語をどうしても使わざるをえないということがあって、このような表記となっている。「女性語」には「女性的表現」などの類似した言い方も含む。勿論、対になる「男性語」についても同様のことが言えるが、『女性語辞典』はあるのに『男性語辞典』がないように、これはあまり一般的な語ではない。“普通の言葉”が男性の言葉で、女性の言葉はそこからはずれたもの、という意識の反映かと考えられる。

## 2-1. 「女性語」の内容

日本語学の事典類や概論書で、日本語の特色として「女性語」の存在に言及したり、また日本語の語彙の位相の説明として、性による言葉遣いの差異について言及したりすることが多い。ここではそのうちの一つ（注1）を少し長い引用する。

【性による差—男性語と女性語】男性の用いるすべてのことばを男性語といい、女性の用いるす

すべてのことばを女性語という。狭義には、その差の顕著なものについていう。女性語は、また婦人語ともいう。現代語において、人称代名詞一人称で「ぼく・おれ・わし」は男性が使い、「あたし・あたし」は女性が使う。普通、逆は使わない。また、終助詞「ぜ・ぞ・な」は男性が使い、「よ・ね・わ・かしら」は女性が使う。感動詞「ほう・おい・なあ」は男性が使い、「あら・まあ・ちよいと」は女性が使う。敬語において「ませ・まし」は普通、女性が使い、手紙においてあて名の脇付けに「(御)侍史・机下・膝下」は男性が、「御前に・みもとへ」は女性が使うのが普通である。このような事例は数えあげればきりが無い。日本語は世界の言語の中でも、男性語と女性語の相違が特に著しいといわれる。【特質】女性語の特質として(1)女性特有の単語を使う、(2)漢語などの固いことばや野卑な、下品なことばを避ける、(3)間投詞や終助詞などの強意語を多く使う。女性特有のものがある、(4)敬語的表現、丁寧な言い方、婉曲な物言いや言い切らない表現が多い、(5)音域が比較的高音部に属する、(6)抑揚や音の強調などが変化に富む、(7)変体がなを好んで使うなどがあり、男性語の特質として女性語の逆があげられるが、その他、(1)男性特有の単語、(2)終助詞・間投助詞・文末のイントネーションなどにその特徴がみられる。【要因】女性語を支える要因として、女性としての生理的、感情的な条件から自然に生ずる面と女性の社会的、家庭的な地位、環境の伝統的なあり方に根ざす面とがある。特に、後者の要因により女性の身分・環境・教養等が男性と著しく相違した時代(江戸時代など)に特に顕著になる。そのような意味で現代は女性語が現われにくい時代といえようか。また、時代・世代・社会層によっても異なる。(『国語学大辞典』より)

以上が日本語学の中に位置づけられた「女性語」の説明である。

このように日本語に「男性語」「女性語」の区別があることについて、特に「女性語」というものが存在することについては、日本語の使い手として肯定的に捉える人も少なくない。そこから、「女性は女性らしい言葉遣いをすべきだ」という考えが生まれて来るし、それに従わない女性の言葉遣いを批判する、という事態が生じてくる。これについては遠藤(1997)や佐竹(2003)に詳しい。

こうした「女性語」の存在には、現代語における性差縮小の実態を研究する人々から、あるいは、フェミニズム言語学の側から、疑義や異議が提出されている。次章でそれについて述べたい。

## 2-2. 「女性語」の存在に対する疑義—談話資料分析による性差研究の成果として

上に引用した『国語学大辞典』の中でも、現代では「女性語」が現われにくい、と述べられている。また、談話資料分析で筆者の関わったものについて言えば、『女性のことば・職場編』(1997)、『男性のことば・職場編』(2002)の自然談話データを分析したいくつかの論文において、敬語、文末表現、疑問表現、自称詞、漢語などの使用で、従来「女性語」の特徴とされていたものが実はそれほど多く出ていないことが指摘されている(注2)。

また、高崎(1988)においても、男女の言葉遣いの接近を論じているが、その中で「女性特有と見られる言語活動や言語形式の多くの部分は、有職・無職の差という、社会的位置のちがいがからくるものであることが考えられる」と指摘している。つまり、「男は仕事・女は家庭」という従来からのジェンダーに反していることになる有職女性の言葉遣いが、脱「女性語」化している、ということ

## 話し言葉の性差—男性の「女性語」使用とジェンダーの関わりに注目して—

ある。

高崎（1993）でも、女性の言語活動や言語表現の多様性を、アンケート等から立証し、「女性語」として一括りにできない、と結論づけている。

すなわち、「女性語」として上記 2-1 であげられたような内容は、実質的に痩せてきている。実際の使用を減らしており「女性語」として現代日本語の中に特に立てる必要があるほど、質・量ともに大きな存在とは言えなくなってきているのではなかろうか。

## 2-3. 「女性語」という存在そのものに対する異議—ジェンダー論から

上述のように性差の接近は進んでいくにしても、「女性語」が日本語からなくなることはないだろう。なぜならば「女性語」というのは実際の女性の日々の言語使用・言語行動をさすのではなく、「日本語には女性語が古くからあるが、最近の若い女性はそれを使わなくなった」「女性なら女性語を使うのが好ましい」のように、何処かに在る概念、あるいは何処かに在ると信じられている規範のような存在であるからだ。「女性語」という概念を使って、日本人の言語行動を見つめているかぎり、それは存在し続ける。

単に、丁寧な言い方、遠慮した言い方等々であるものを「女性語」という概念で一括りにしている、とも言えるのである。そこには、女性がなぜ、専ら丁寧な言い方、遠慮した言い方をしなければならぬか、という問題が潜んでいるわけだが、「女性だから女性語を使うんだ」と考えるとそういった問題は可視的にならない。

このような、「女性語」の側面に気づかせてくれるのが、ジェンダー論からの「女性語」研究である。

中村（1996）は

「女ことば」は女のディスコースの規範とみなされているだけでなく、「女らしさ」や「日本女性のすばらしさ」という概念と結びついている。「女らしさ」や「日本女性のすばらしさ」という概念が、一見性差別とは無関係なプラスの価値を持つ概念だけに、その規制力は強まる。

と述べている。

女性らしい言葉遣いが存在するから、日本語の中に「女性語」が指定されるのではなく、「女性語」という概念が存在するから、「女性らしい言葉遣い」という規範が日本語の使い手の中にあるのだと言えよう。

## 2-4. 「女性語」の捉えなおしの試み

ここでは、今まで述べてきたことをふまえ、【「女性語」=女性を使うべきだとされている言語形式】として、その具体的な言語形式をいくつか取り上げて再検討してみよう。

尾崎（1999）では、「女性語」としてあげられることの多い終助詞「わ」と、助動詞「だ」の不使用方法について取り上げている。まず「わ」について、その中心的機能を「詠嘆」とありとし、次のように述べる。

「わ」の直前までの主張や判断をそのままストレートに相手に表現せず、その発話内容を、相手に直接関わらない自己の詠嘆として一度内在化させ、その自己の思いの発露という形で相手に間接的に主張するというやり方と言える。主張の方向を相手ではなく、いわば自己に向けることを

通し、相手に対する主張の度合いを和らげているのである。

次に「だ」の不使用について、つまり「だ」を使用できるところで使用しない場合（たとえば「もう朝だよ」とせずに「もう朝よ」とするような場合）についても、やはり「主張の和らげ」であるとしている。

すなわち、「わ」の使用、「だ」の不使用、ともに、対人的機能としては「主張の和らげ」として働いていることになる。ということは、男性も、「主張の和らげ」をする必要のあるときは、「わ」の使用、「だ」の不使用を採用する可能性があるものと思われる。たとえば、男性が「わ」を使用する場合について観察してみると、女性が「朝だわ↑」と僅かに上げイントネーションで言う場合と「朝だわ↓」と僅かに下げて言う場合と両方あるのに対し、男性は後者を採用する、といった違いがある。が、語彙としては両者とも「わ」を採用していると言ってよいと思われる。

また、鈴木（1997）では、「女性語」の本質を「話し手の、聞き手に対する丁寧さに関する配慮」と関連づけて述べている。すなわち、聞き手に対して選択の余地を与えない、〈行為指示型の発話（例：早く行け）〉や〈解答要求型の発話（例：どこへ行くんだ？）〉、聞き手に直接向けられた〈断定・主張型の発話（例：そっちが悪いんだ）〉は、「女性語」としては不適切になる。これらの発話を「女性語」として適切にするためには、

1. 聞き手に、判断・決定の権利を残した語形式を使用する。例：早く行ったら？
2. 語形式上、何らかの丁寧化を行う。例：早くお行きなさい
3. 「わ」の使用などにより、聞き手めあての発話でない、独り言のような形にする。

例：そっちが悪いんだわ

等の操作をする。これら1～3は、聞き手に選択の余地を残す、聞き手の領域に立ち入らない、という配慮がなされていることになり、それはすなわち、日本語の一般的丁寧さの規則と合致する、という。つまり「女性語」は、丁寧な表現と合致する面を持っていることになる。

もう一つ、「女性語」としてよくあがるものに終助詞「ね」があるが、宇佐美（1997）においては、「ね」（終助詞・間投詞・感動詞等と分類されるものを包括）の、会話におけるコミュニケーション機能として

- ①会話促進機能 ②注意喚起機能 ③発話緩和機能 ④発話内容確認機能
- ⑤発話埋め合わせ機能

の5つをあげる。①は会話のテンポを作り出す働き、②は相手を自分の話題に引き込む働き、③は聞き手の感情に配慮して自分の発話を和らげる働き、④は自分の発話の内容に確信を欠く場合に聞き手に確認する働き、⑤は次の表現を計画する時間を稼ぐためなどのフィラーに付ける場合（「あのですね」などと言うように）で、間を埋め合わせる働き、と説明されている。

以上、いくつかの先行研究から、「女性語」と言われる言語形式は、実際の機能としては、それぞれ和らげや丁寧、会話促進や注意喚起、等々の機能をもつ言語形式として捉え直すことができることがわかる。男性でも、これらの機能を会話のなかで必要とする場面もあることは、明らかであろう。さらに、問題は、なぜ、和らげや丁寧さ、会話促進や注意喚起などが「女性語」に結びつけられるの

話し言葉の<sup>ジェンダー</sup>性差—男性の「女性語」使用とジェンダーの関わりに注目して—

か、ということになってこよう。

### 3. 男性が職場で「女性語」を使用する場合

ここでは、男性が「女性語」を使用している例について検討したい。実際の発話例は、筆者も参加した共同研究『男性のことば：職場編』（注2を参照）において作製したデータベースからとった。首都圏の有職の20～50代の男性21人に各々の職場での自然談話を録音してもらったテープを起こしたものに基づいて作製した。職業も会社員、教員、自営など色々で、場面も会議・打ち合わせや休憩・雑談などバラエティーに富んでいる。

対象とした「女性語」は、

- 2-1で引用した『国語学大事典』の記述の中から①終助詞「よ」、②終助詞「ね」、③感動詞「あら」
- れいのるず（2001）で「女ことば」として取り上げられている「の文（例「車が故障したの）」の④終助詞「の」、
- 寿岳（1995）で女房詞からきていて、現代でも「うまい」との比較において「女ことば」であるとされている⑤「おいしい」、
- 『日本語百科大事典』（注3）で女性がよく使うとされている⑥美化語としての「お」をつけた語

の6種で、なるべくいろいろな文献から、「女性語」とされているものを選んだ。これらを上述の談話資料の中で捜してみた。

以下、順次、例を示す。

#### ①「～よ」

例1. 20B 男：###個別教科の組み立てで学校はなりたってるという先入観があったわけよ。

\*「20B」は、この例をとった上述の『男性のことば・職場編』データベースにおける発話者を示す記号。「###」は聞き取り不能箇所を示す記号。以下の例でも同様。

<用例1の解説>

20Bは52歳・教員。場面は会議。会議には他に34歳、42歳、56歳の3人の男性教員が参加している。これは「わけだよ」とも言えるので、「だ」の不使用の例にもなっている。

例2. 05G 男：恐いから同乗してくれっっちゃう。〈笑い 複数〉

05A 男：誰が恐いのよー。

<用例2の解説>

05Gは38歳・建築会社課長。05Aは52歳・同所長。場面は雑談。

#### ②「～ね」

例3. 11B 男：教頭にいったら、あの一今度教務のほうから。

11H 男：はい。

11B 男：もらってくださいって、いわれたのね。

<用例3の解説>

11Bは51歳・教員。11Hは53歳・教員。場面は打合せ。

例4. 01A 男：ちょっとこれ、あの一、確認を取りますけどー。

01F 女：はい。

01A 男：あの一、本には何も書いてないのねー↑

<用例4の解説>

01Aは44歳・薬局経営者。01Fは30歳・薬剤師。場面は打合せ。

③「あら」

例5. 13A 男：正しくありません。(笑い) あらー。

13E 女：正しくない。

<用例5の解説>

13Aは27歳・アルバイト。13Eは32歳・事務補佐員。場面はコンピュータの操作方法の相談と説明。

例6. 06D 男：〇〇(人名)とやったやつは落ちちゃった。

06A 男：あらー。〈笑い〉

06D 男：も一作戦練り直しとかいって。

<用例6の解説>

06Dは42歳・教員。06Aは45歳・教員。場面は休憩。

④「～の」

例7. 10C 男：地下、どっかのボーリングしたのが、1300メートルぐらい掘ってるらしいよ。

10A 男：あ、自然に湧き出たんじゃなくてー、ボーリングしたら、温泉が出てきたのの↑

<用例7の解説>

10Cは61歳・会社顧問。10Aは59歳・会社部長。場面は雑談。

例8. 09L 男：ぼくはフランス語。

09M 男：フランス語なんですか↑ あ、そうなのの。

<用例8の解説>

09Lは28歳・技術職。09Mは30歳・技術職。場面は雑談。

⑤「おいしい」

例9. 12C 男：このパンおいしいですね。

12H 男：うん、おいしい##。

(中略)

12A 男：うん、★おいしい。

12H 男：→おいしい←、おいしい★でしょ。

12F 男：→ここ←はおいしいだけで##。

話し言葉の性差—男性の「女性語」使用とジェンダーの関わりに注目して—

(中略)

12A 男：よかった。〈間 3秒〉

12H 男：中も柔らかいデザインのフランスパンでおいしいんですね↑ 〈間 2秒〉

(中略)

12A 男：おいしい。

12H 男：おいしいですね。

12A 男：うん。〈間 1秒〉

(中略)

12A 男：あの、これやうめーや、ちょっと、やばいんじゃない。

(中略)

12H 男：おいしいね↑、このパン。〈間 4秒〉

12A 男：味がある。〈間 2秒〉

(中略)

12I 男：パンもおいしいです。

12H 男：うんー、このパンおいしい###。

12H 男：このパンおいしいよ##。

12H 男：ほんとおいしいよ#。〈笑い 複数〉

〈用例の解説〉

12Cは22才・会社員（営業職）、12Hは34才・会社員（企画職）、12Aは51才・会社経営者、12Fは39才・会社員（営業職）、12Iは23才・会社員（営業職）。場面は雑談。少し長いので、中略がいくつかあるが、すべて同一のレストランで昼休みの食事時の会話。★印より右のことばと、下段の→←印のことばが重なって発せられている。

⑥「お」をつけた語

例10. 12I 男：たとえばたくさん取ったとして、販促物がない商品をお売る自信でいっ、ゆうのは、お店にとってはないんですよ。

〈用例10の解説〉

12Iは23歳・会社営業職。場面は会議で、他に51歳男・会社経営者、39歳男・会社営業主任が出席。

例11. 17A 男：結局○○（地名）とかって、そいで、○○とかって一出てたとすると、○○  
ってのは、△△（地名）のお近くだんですが、■（地名）じゃないんですが。

〈用例11の解説〉

17Aは32歳・会社員（スーパーバイザー職）。場面は打合せで、相手は40歳男・会社員（チームリーダー）。

#### 4. 分析

さて、以上のような男性の「女性語」使用について、「女性語」の実際およびその捉え直しをふまえながら、考えてみることにしたい。

まずこれらの用例をみてみると、場面もさまざまで、特にくだけた場面ばかりということもない。用例の前後の話線の流れを見ると、中立的ないしは、男性のジェンダーに沿った言語形式（いわゆる「男性語」）の中に、これら「女性語」含む言い方が散らばっていることが観察される。たとえば⑤「おいしい」の例9は、12Aが「おいしい」と言ったり「うめーや」と言ったりしている。

②の例4と、③の例5以外は聞き手も男性である。東（1997）に、アメリカ人カップル20組を被験者として行った会話実験の結果が紹介されているが、そこに「男性、女性とも、自分の性の特徴が最も強く現れるのは、同性と話している場合である」とある。要約である、と断っているので詳細は不明だが、“男性同士、女性同士で話すときの方が、異性と話すときよりも男性らしい、あるいは、女性らしい表現を使う”というふうに解釈すると、今回の一連の日本語の談話例はこれに合致しないものが多い。

また、雑談の場面もあるにせよ、職場、あるいは職場の人間関係の中で行われる談話に、「女性語」が使われるということの意味を考えることが必要だ。おそらく話し手の男性には「女性語」を使っているという意識、使おうという意図は殆どないだろう、と思われる。少し和らげよう、押しつけがましくなくようにしたい、相手の抵抗感を減らしたい、親しい感じを出そう、などという、コミュニケーション上の志向性が、これらの言語形式を選択させたのではないか。

このように考えると、「女性語」というもののジェンダーもまた浮かび上がってくる。和らげられ、押しつけがましくなく、抵抗感が少ない、親しみやすい、等々というのが、コミュニケーションに求められる女性役割なのである。ただし、これは、日本語について言えることであり、もっと言うならば、日本の女性のジェンダー的位置づけでもあろう。

そのことに関してだが、阿部（1997）は、マダカスカル社会におけるキーナン（Keenan, Elinor）の調査を紹介している。それによると、マダカスカルでは男性の方が女性に比べて婉曲的で遠回しに物事を言うのに対し、女性は物事をはっきり述べたり、他人の批判や反対意見を直接述べる、という。しかし、社会において男性の方が女性よりも地位が低いということではなく、この社会で重要と思われているのは、他人の面子を保ち、直接他人を批判しないことであり、男性はこの規範に沿った話し方をしているのだ、という。アメリカでは、男性の方がはっきり意見を述べたり、他人の批判を直接行うが、女性はその逆であると言われていることを考えると、マダカスカルとアメリカは正反対に見える。しかしながら、男性がそれぞれの社会において価値のある話し方を選択している、という点に共通性が認められるのだ、と阿部（同上）は述べている。

ロメイン（1997）も、

女性のことばづかいの特徴とされるもののうち、どの程度が本当にそうなのであろうか。「女こ

話し言葉の性差<sup>ジェンダー</sup>—男性の「女性語」使用とジェンダーの関わりに注目して—

とば」の特徴とされているもののなかには、男性が従属する立場におかれたときに用いるものもあるのだ。ということは、女性のことばは「力をもたない者のことば」ということになるのだろうか。

と述べている。

男女ともに使っていていいことばのうちから、弱い立場の時に使うものだけを寄せ集めて、女性に押しつけて、やがて女性もそれを受け入れながらも、実際の言語使用ではしばしば“逸脱”と見える“先祖返り”を繰り返してきたのが、「女性語」の歴史ではなかろうか。男性はそれを女性の方に追いやってしまったと思こんでいるにしても、時々には必要を感じて利用しているのではないか。

## 5. 日本語史の先行研究から

このように考えてくると、少し前の時代のことが知りたくなる。歴史的に見て、「女性語」とされていたものを実際は男性が使用していた、ということがあつたのだろうか。染谷（2002）は、鎌倉時代頃から使われたとされる女性専用自称詞「わらは」が、お伽草子において男性話者に使用されている例について論じている。そして、

まず女性使用の自称「わらは」が先行し、一般化する一方で、中世という時代を背景にした男性使用の自称「わらは」が新たに生じたとみてよい。その転用の時期も室町時代頃と推測するが、その語としての寿命もあまり長くなく、新たな社会の変化と共に消滅していくのである。

と述べる。そして、それらの「わらは」の使用例を検討したあと、「言ってみれば、『わらは』を使う人間は『一人前の人間ではない』『普通の人間ではない』ことを象徴しているのではなかろうか」と述べている。

これですぐに思ひ合わされるのは、氏家（1996）が Lakoff, R の “Language and Woman’s Place” を引用して「英語文化における場合、日本語と趣を異にするのは（中略）女性専用の表現を或る種の男性もするのだが、それが年齢でも階級でも特殊な意図に基づくのではなく、要するに社会的にアウトサイダーという位置づけをもつ男性だという点である。」としている記述である。

時代も言語も異なるが、「女性語」を使う男性が「普通の人間からはずれた存在」と見なされた男性であったことが、共通して認められる。そしてここでいう「普通の人間」とは「普通の男性」のことであるから、女性ももちろんアウトサイダーであるわけである。

もう少し遡って、平安時代はどうであろうか。山口（1998）によると、平安時代では「現代と同様に、女性特有語を指摘するのは難しい。むしろ、作品によって差があるけれど、『源氏物語』においては特に困難である」という。すなわち、「源氏物語」では、敬語的表現や言い切らない表現の使用においても、数量的には男女差が捉えられないこと、また、男性の会話に甘く感情的な形容詞が少なく女性の会話に多い、ということは簡単には言えないらしいこと、漢語などの固い言葉を女性は避けるということも使用率という点では言えないということ、女性使用の一人称代名詞とされた「ここ」と、男性使用とされた「まる」も、男女でなく人物造型に関係して使い分けられていること、等々が

指摘されている。この他、禁止表現の「な——そ」と「——な」も男女で使い分けられていたのではなく、男女共用語であったと判断される、と言う。

さらに山口（同上）では「男性特有語」について論じ、「そもそも」「はなはだ」「ずして」「によって」「しむ（使役の助動詞）」等々をとりあげたあと、先に言及した「女性特有語」と比較して、

このように男性特有語は割合簡単に指摘することが出来る。ということは、男性の使う語彙が女性のそれよりも広範囲にわたっているということを暗示している。

という重要な指摘を行っている。

そして、更に遡れば、「土佐日記」の存在がある。「実録の日記から脱して、和文を用い、和歌を交えた女性の日記の体裁で、自照性を持つ自由な文芸としての日記文学を創始したのがこの作品である」（注4）というように文学史上で位置づけられている。しかし、女性に仮託すること自体が目的であったわけではなく、それは結果として、であろうと思われる。仮名文で書きたいという、文体選択上の理由がまずあっての仮構である。なぜ仮名文かという点、「公的身分から解放されて私的感情を開陳するため」（注4に同じ）であり、いろいろな感傷、微妙な感情の動き、その高まりとしての和歌など、書きたい事柄をすみずみまで書き尽くすには、漢文よりも仮名文の方が適切であったからにすぎない。

渡辺（1981）も指摘するように、「紀貫之は、歴史のまだ浅い仮名文の将来の可能性を、同時代人の中で最も強く意識していた人」であったのだ。現に、「土佐日記」の前には、最初の勅撰集たる「古今集」の「仮名序」を記してもいる。歌論とも言うべき論理的な文章を書こうとして、仮名文を選択しているのである。

このことに関連してだが、平安文学研究の方面からも、“女流文学”“女性文学”といった捉え方に対する疑義が提起されているようだ。河添（1996）は、

女性の側から男文化への逸脱は次第に出すぎたこととされる風潮が生まれるにしても、平安期とは、そもそも文化レベルでの性的越境が奇異ではなく、むしろ賞揚された時代であり、文学においても男性性・女性性を自由に往還できることが理想像として求められた時代でもあったといえよう。

と指摘している。やはり、「女性文学」また、「女性語」のような“女性〇〇”という“囲い込み”（河添氏の言葉）は、対象の本質を見あやませるものと言えよう。

以上のように見てくると、歴史的に見ても「女性語」というのはそれほど確固とした実体が昔からあったわけでもないという可能性や、女性専用と考えられていた言語形式を男性が使用するということが行われていた可能性を教えられる。もう少しはっきりさせるためには、今後も、2-4で試みたように、日本語史の中で「女性語」とされてきたもの（たとえば「女房詞」なども含めて）を、他の角度から説明できないかどうか、吟味していく必要があるだろう（注5）。

## 6. むすび

男性が職場という社会的・公的な場で「女性語」を使う、ということは批判されるのだろうか。また、批判されるような言葉遣いを、あえて男性が使用し続けるだろうか。男性が、表現のパラエティとして使用しており、容認もされている言葉遣いは、もはや「女性語」とは言えないものではないだろうか。

こう考えると、中村（1996）などで言われている、女性の「女性語」使用のダブルバインドということ想起せざるをえない。つまり、女性は「女性語」を使えば、「まわりくどい」「何を言っているのかわからない」などと言われ、また使わなければ「はしたない」「聞き苦しい」などと言われる状態にあることを指してダブルバインドというのである。

今、「女性語」の実態が細りつつあるとしたら、ダブルバインドのうちの「まわりくどい」「なにを言っているのかわからない」と言われるよりも、「はしたない」「聞き苦しい」と言われる方がいい、と個々の女性が究極の選択をした結果なのであろう。

男性には、こうした「男性語」使用のダブルバインド、使っても使わなくても非難される、ということは、女性と比較して少ないのではないか。

ところで、マリィ（1997）は、ジェンダーを性質ではなく行為として解釈し、「社会に生きる者はそのジェンダー化された行為を『引用』し、また『引用せざるをえない』」として「実際の行為の段階ではジェンダーは実に動的であり、かつ流動的なものであるのである」と述べている。この解釈を援用すれば、男性の「女性語」使用は女性性のジェンダーの「引用」にすぎず、それは日常的に起きていて何の不思議もない、まさに言葉を「引用」という行為の一つであると説明することができそうである。

また、高崎（1996）では、女性は自らの思考言語の引用という形で、「男性語」を、インタビューのような公的な場でしばしば用いることを指摘した。「よし、やるぞ、ってね、「あんな農村があんのかと思うようなところ」というような例である。男性の場合は自らの思考言語の引用という形で「女性語」を使うことが、（冗談以外に）ありえるだろうか。

どうも、男性の「女性語」使用と、女性の「男性語」使用とは、非対称であるように思われる。確認することが必要だ。

さて、そろそろまとめに入りたい。男性の「女性語」使用は、女だから「女性語」を使うのは女性としてのアイデンティティーであるという言説を否定する。「女性語」をジェンダーとして考えれば、男性が「女性語」を使うのは、和らげ、丁寧、協調などといった、自己のジェンダーに見だしにくい部分を無意識にも補うため「引用」する行為であろう。その結果、男性が使って良しとされる言葉の範囲は、ダブルバインドに囚われた女性より広がるかもしれない。

今回は、6種類の「女性語」だけで、観察したが、他にも資料データの中には「～でしょ↑」「～ましよ」「～じゃない↑」「ちいちゃくて」「凍んない」等々、少なからぬ「女性語」の用例が見いだ

せるので、引き続き調査を続けたい。

また、今後は女性の職場での「男性語」ないし非「女性語」の使用例を集めて、同じくジェンダーの観点から、観察してみる必要があるだろう。最終的には、男性の「女性語」使用と、女性の「男性語」使用の比較から何が見えてくるのか、つきとめてみたい。

以上につき、忌憚のないご批判やご意見を賜りたいと願う次第である。

#### 《付記》

最後に、冒頭にあげた『国語学大事典』で「女性語」とされている「あたし」について、今回の談話資料に用例がなかったため、論じられなかったが、最近、男性が使用している例を立て続けに見つけたので記しておきたい。(以下傍線高崎) まず書き言葉だが「マスコミや警察だけが特権的に情報を入手できるわけでもない環境に、すてにあたしたちは生きている。」(大月隆寛「ネット社会『悪意むき出し』嘆く前に」朝日新聞2003年7月12日朝刊)。次は話し言葉の引用で、評論家の小谷野敦氏は中学のころ「僕」という言葉を嫌って「私」と言っていた、というエピソードで中学時代の友人が「私というよりもアタシといていたような気がするなあ。洒脱な感じになりたかったんじゃないかな」(「現代の肖像 小谷野敦」AERA 2003年8月11日号)と証言。

なお、女性の一人称について、「私」でなく「ウチ」という言い方が最近広がっている、という記事も見られた(「近ごろ女子は幼児も高校生も『私』でなく『ウチ』」AERA 2003年8月18-25日号)。それを意識してか、男性のこんな使用例もあった。「(不景気を話題にした女性の店員に)『ウチの会社もそうなの』と女言葉で調子を合わせたものの」(勢古浩爾「こころの風景」朝日新聞 2003年7月8日夕刊)

これらについてはもう紙幅も尽きたので、用例の列挙にとどめ、次回、改めて論じたいと思う。

#### 注記

注1 『国語学大事典』(1980年 東京堂)の「語彙の位相」の項より

注2 『女性のことば・職場編』(現代日本語研究会編 1997年 ひつじ書房)は、1993年に、首都圏の会社・学校等19の職場で働く女性のことばを、録音・データベース化したフロッピーと、それらを分析した10編の論文を収める。

『男性のことば・職場編』(現代日本語研究会編 2002年 ひつじ書房)は、1999~2000年にわたり、首都圏の21の職場で働く男性のことばを、録音・データベース化したCD-ROMと、それらを分析した12編の論文を収める。

注3 『日本語百科大事典』(金田一春彦他編 1988年 大修館書店)の「現代語の多様性」の項

注4 『日本古典文学大事典』(岩波書店1985年)の「土佐日記」の項より

注5 「女房詞」の捉え直しを扱うものに寿岳(1995)がある。

#### 引用文献

- 東 照二『社会言語学入門』研究社 1997年 P88
- 阿部圭子「フェミニスト人類学から見た異文化における女性語」『女性語の世界』明治書院 1997年 P231~

話し言葉の性差—男性の「女性語」使用とジェンダーの関わりに注目して—

239

- 宇佐美まゆみ「『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば・職場編』ひつじ書房 1997年 P241～268
- 氏家洋子『言語文化学の視点』おうふう 1996年 P146
- 遠藤織枝『女のことばの文化史』学陽書房 1997年
- 尾崎喜光「女性語の寿命」『日本語学』18-9 明治書院 1999年 P60～71
- 河添房江「平安女性と文学」『岩波講座 日本文学史 2, 10世紀の文学』岩波書店 1996年 P185～208
- 佐竹久仁子「『女ことば/男ことば』規範をめぐる言説」現代日本語研究会嵐山ワークショップ発表資料 2003年
- 寿岳章子「『女房詞』と女性史のかかわり」『ジェンダーの日本史 下』東大出版会 1995年 P111～136
- 鈴木 睦「女性語の本質—丁寧さ、発話行為の視点から」『女性語の世界』明治書院 1997年 P59～73
- 染谷裕子「男性使用の自称『わらは』」『国語論究 9 現代の位相研究』明治書院 2002年 P100～121
- 高崎みどり「模索期の女性語」『ことば』9号 現代日本語研究会 1988年 P23～40
- ———「女性のことばと階層」『日本語学』12-6 明治書院 1993年 P169～180
- ———「テレビと女性語」『日本語学』15-9 明治書院 1996年 P46～56
- ———「『女ことば』を創りかえる女性の多様な言語行動」『言語』31-2 2002年 P40～47
- 中村桃子「言語規範としての『女ことば』」『関東学院大学経済学部総合学術論叢 自然・人間・社会』201996年 P33～60
- マリィ, クレア「ジェンダー指標とジェンダーの意味変化」『現代思想』12月号 1997年 P262～278
- 山口仲美『平安朝の言葉と文体』風間書房 1998年 P101～121
- れいのるず秋葉かつえ「日本語の中の性差のゆくえ」『言語』30-1 大修館 2001年 P30～35
- ロメイン, スザン 土田滋他訳『社会のなかの言語』三省堂 1997年 P125
- 渡辺 実『平安朝文章史』東京大学出版会 1981年 P54～55

## 参考文献

- 中村桃子『ことばとジェンダー』勁草書房 2001年

(たかさき・みどり 商学部教授)